

2020 Eye's
新潟ここだけ物語

想い | つくる | 伝える

新潟市江南区

[Fuud]

2020
春号
—— 季刊 ——

豪農の館の樹々

田園地帯の片隅で、豪族の館のように構える北方文化博物館。その広大な屋敷では、無数の樹々が風雪に堪え時を過ごしている。そのなかで目を惹いた糸檜葉の古木。幹にできたウロのなかには、新天地を見つけた種が次世代の命を育んでいた。(新潟市江南区沢海)

Take Free
ご自由にお持ちください

がんばろう ● ニッポン!

守られてきた自然の中で深呼吸

〔新潟市中央区〕 文／本望典子



春らしい快晴の一日、久しぶりに屋外での心地良い時間を過ごした。どこからともなくシャボン玉が飛んできて、目の前で弾けた。野鳥の鳴き声を聞きながら、カルガモの水浴びやカメの甲羅干しを眺めた。遠くで子どもたちのはしゃぐ声が聞こえる。世の中の不穏な動きとは別世界のような優しい時間だ。

スポーツ公園の中央に位置するカナールの周辺には、季節の花々が植えられている。数ヶ月前に訪れたときは、カナール年一回の大清掃で、堆積した泥を取り除く作業が行われていた。前段で触れたカルガモやカメがいる自然生態園周辺はもちろん、東側にあるながたの森まで、公園内の豊かな自然は、たくさんの人の力によって守られていることに感謝しなければならない。

多目的芝生広場近くの修景池周辺は、新潟平野の原風景を再現して作られている。池は海岸、せせらぎは信濃川、芝生地は田園風景をイメージしているという。池の近くで遊んでいる小学生の男の子に「何かい



るの?」と聞いてみた。「さっきカゲがいたんだよね」といたずらっぽい笑顔が返ってきたことに安堵した。楽しそうに石を移動し、穴を掘る、自然の中で過ごす子どもたちの様子も、普段ならやり過ごすところだろう。こんな時世だから、何気ない日常が特別なことのように思えるのかも知れない。

カナールのウォーキングコースは1周約1km、スポーツ公園全体では約3km。犬の散歩をする人、散歩を楽しむご夫婦、ベンチで軽食をとる女性もいた。自然はいつだって、人間に大切なことを教えてくれる。少し立ち止まること、ゆっくり呼吸をすること、穏やかな心で過ごすこと…。

最後にひとつ。園内にあるピアノのオブジェを見かけたらぜひ鍵盤に触れてみて欲しい。20年以上前の鉄製のオブジェから美しい音が出るのを知ったときは、メンテナンスを続けてきた方のご苦労がしのばれて頭が下がる思いであった。

カナール

概要／「新潟県スポーツ公園」の中央に位置する、長さ約400m、幅約30mの運河。平成10年に行われた、第15回「全国都市緑化フェア～にいがた緑のものがたり'98～」に合わせて開発が進められた。カナールに架かるカナール橋からは、南に両スタジアム、北に鳥屋野潟とその対岸の市街地が望める。



編集後記

北方文化博物館の真髄は、豪農伊藤家の美学にあった。そして、その周縁には越後の広大な低湿地が広がり、そこに根づいた数多の農民がいて、さらに江戸から昭和までの時代が隆々と波打っていた。名利だけでない大地主のヒューマニティが、わたしにはようやく見えた。七代伊藤文吉のありし日を『作事のものとは旦那さまがいる事務所に入れなかったので、めったにお会いしませんでした。たまに行き違った時には、〈おお難儀だの～。お前のお陰で助かってる。これからも頑張ってくださいの〉とニコニコしながら労ってくれました。そのお人柄に触れるたびに、旦那様に一生尽くそうと思いました』と小池勝榮さんが教えてくれた。やはり北方文化博物館は、古き良き日本の心を伝える物語の宝庫だった。新潟がもっともっと誇っているスケールの大きい未来遺産でも、あった。(渋川)

発行所

まごころ印刷の
株式会社 タカヨシ 編集室

SUSTAINABLE
DEVELOPMENT GOALS

私たちは持続可能な開発目標 (SDGs) を支援しています。

■本社・工場／〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 381-4800
■東京支社／〒113-0034 東京都文京区湯島3丁目24-11 湯島北東ビル2階 TEL (03) 3837-4488 FAX (03) 3837-4884
■仙台営業所／〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉5丁目501号室 TEL (022) 266-1711 FAX (022) 266-1712
■名古屋営業所／〒465-0093 愛知県名古屋市中区東区一丁目79 第六名昭ビル6A TEL (052) 753-8080 FAX (052) 753-8081
■オフィシャルサイト／<http://www.takayoshi.co.jp>

「ふうど」はここに置いてあります

【新潟市】＜中央区＞ANAクラウンプラザホテル新潟、駅前オフィスNII GATA、NSG学びステーション、NST、NPO法人 Made in 越後、上町商店街、旧小澤家住宅、県立自然科学館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、田中屋本店みなと工房、朱鷺メッセ、新潟NPO協会、新潟絵屋、新潟 加島屋本店、新潟県政記念館、新潟県庁広報展示室、新潟県民会館、新潟県立図書館、新潟国際情報大学、新潟中央キャンパス、新潟市市民活動支援センター、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・花育センター、新潟市中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニゾンプラザ、ピアBandal、ホテルイタリア軒、ホテル日航新潟、リバーとびあ新潟市民芸術文化会館 ＜東区＞桑名病院、パティスリーカフェオールラン ＜西区＞新潟ふるさと村、新潟大学附属図書館、佐潟荘 ＜南区＞新潟市農業活性化研究センター ＜北区＞新潟せんべい王国、ピュー福島潟、新潟空港、濁川公民館 ＜江南区＞介護老人保健施設亀田園、新潟市立亀田図書館 ＜西蒲区＞カブドッチ、ドメーヌ・シオ ＜秋葉区＞カフェギャラリーやまぼうし、川内自動車、新津鉄道資料館
【新発田市】加治川地区公民館、紫雲寺地区公民館、新発田市民生涯学習センター、新発田市民文化会館、新発田市民立図書館、豊浦地区公民館 【聖籠町】聖籠観音の湯 ざぶーん 【村上市】イヨボヤ会館、村上市観光協会
【長岡市】新潟県立歴史博物館、長岡市立科学博物館、長岡大学、長岡市立中央図書館、長岡西病院、やまこし復興交流館おたる 【燕市】分水ビクターサービスセンター
【佐渡市】SADO伝統文化と環境福祉の専門学校、ホテル大佐渡
【東京都】＜渋谷区＞表参道・新潟館ネクス ＜中央区＞ブリッジにいがた ＜千代田区＞新潟市東京事務所

本誌に掲載されている写真等の無断転載はご遠慮ください。

エコプレス
バインダー

針金・糊・加熱が不要な製本方法を採用し、リサイクルや怪我の危険へ配慮しています。

rice
ink

この印刷物は環境にやさしい米ぬか油を使用したライスインキで印刷しています。

遙か遠い時の彼方から、何かを語りかけてくる樹木。昭和初頭、県内一の大地主になった新潟市の豪農伊藤家。その遺構と心を守り伝える北方文化博物館が開館し、今年で七十四年。この間、非凡な造園師による作庭や、さまざまな植栽が加えられ、もうすぐ令和の庭園美も添えられる。県下最大級の豪農の館の、樹木を見つめてみた。

おしやべりな庭

想い 緑のタイムマシン

流星木からの伝言

筋状の雲が、時折、茶色い地平線の一部を隠した日。北方文化博物館の広い邸内は、重たい大気に包まれて静まりかえっていた。

暖冬だったとはいえ寒風に耐えた樹々の声を聴きたくて、庭木が集中する前庭に行く。正門玄関につづくアプローチである。足元の敷石に誘われるまま進み、まわりに目を凝らすと、あるわあるわ。さまざまな樹形を誇る老松。雪つりを施された低木の数々。青々とした苔。そして点々と立てられた石など。それらが渾然一体となり、命ある美の

小宇宙を形成していた。さすが豪農の館の心を象徴する前庭である。一点の穢れも綻びも見逃さない気概が隅々に行き渡り、それでいて誰をも受け入れる包容力に充ちていた。

石造りの大きな常夜燈を右手に、奥へと進む。すると思いがけず大きな樹が、目の前に現われた。端正な前庭の樹々とは対極にある、大自然の野性をたぎらせた糸檜葉が、身を大きく傾けながら、ひっそりと時を重ねていたのである。樹齢およそ四百年。大空に広げた無数の枝が細長い葉をつけ、土蔵と黒塀で囲まれた空間をうっすらと覆っている。糸檜葉は「流星木」という、宇宙的な別名を持ち、枝の垂れる性質から、流れる滝のような樹形が特徴。古い庭には必ず植えられていた、寿命の長い

樹である。黒塀の向こうは、沢海の鎮守日枝神社。その神域と俗域を分かつように古樹がそびえている。でも、こんな立派な樹がどうして屋敷の隅に隠れていたのか。

その場所は、館に隣接する曹洞宗の古刹大栄寺の隠居寮があったところ。伊藤家が現在の建物を建築する時、屋敷を広げるために明治十三年（一八八〇）頃に取得し、江戸初期からあった古い庭の一部をそのまま残したという。糸檜葉は、四百年の間、その場所から人の世を見おろしていたのだ。

大逆風の記憶

もう一本、何かを話したような古木が大藤棚の隅で待っていた。初夏に百五十平方メートルの棚いっぱい、花の房を垂らす藤の木である。その一本の樹の幹だけで、大藤棚が仕立てられていることを

知る人は少ないだろう。どのよう仕立てるのだろうか。七十年ほどの間、毎年、見事な藤の花を咲かせ続けてきた小池勝榮さんに聞いてみた。小池さんは伊藤家が博物館に姿を変える頃から、伊藤家に仕え、昨年職を退いたばかり。庭師としての名声は高く、県内の造園関係者の間では知る人ぞ知る名人である。

「私のやり方は、造園家のそれとは違っていて、果樹園の棚づくりを基本にしています」。えっ、花なのに、なぜ果物のやり方なの？ その答えは、地主たちを震撼させた戦後の農地改革にあった。「戦争が終わった直後、旦那さまからこれからは敷地内に果樹園をつくり、収穫した果物を市場に売り、その売り上げを給料にしないでほしい。だから試験場に行き先生から果物の栽培法を習ってきなさい」と言われました。その先生は田野貫一という、ぶどうの新品種タノレットを世に出し、新高梨の栽培技術を向上させるなど果物づくりが上手な人でした。一本の梨の樹から約千平方メートルの梨園を作るほどの技術がありまして、その棚づくりや剪定の仕方を藤棚に応用したのです」。

藤は、生命力が旺盛なツル科植物。放置すると小枝が絡みあい日陰ができ、太陽が当たらず生育が悪くなるため、天に伸びようとする小枝を棚に添わせるように手を入れる。

また花芽がつき始める寒の時期に、花芽の根元を整理し、花の集中具合を調整。長い経験で藤の樹の性質を熟知している小池さんは、藤棚のどこに、どれだけのポリウムで花を咲かせるかをコントロールできる。開花後に剪定する時点で、すでに翌年の満開の様子が見えています」ときつ

ぱり言いきる。そして藤が大樹になった理由に、阿賀野川がもたらす豊富な地下水の存在をあげる。藤は水を好む植物。藤棚のある場所は、昔、四本の大きな井戸と水揚げポンプや濾過装置などがあった伊藤家の取水場だった。上水道が完備される前、その場所が空き、そこをお休み

処にすることを八代伊藤文吉が考案。その時に屋敷の別の場所に植えられていた藤を移植したところ、めきめきと成長したそう。名字の伊藤に「藤」があることから、ご神木として大切にされている。

なお伊藤家で作った果物は、主にぶどうと桃。小池さんは、ぶどう作

りを担当。果物の運搬も担った。毎朝収穫した果物をリヤカーに積み、手伝いの女の子と一緒に歩いて、中央区本町にある仲買人の店まで運んだ。片道一約時間半。本町通いは二十七年間続いたという。

博物館の樹々の伴走者、小池さんの話はまだまだ続く。

- ① 幹廻り約5m、樹齢およそ400年の糸檜葉の古木。
② 正門の前の老松。足元の自然石との組み合わせが絶妙。
③ 大藤棚を作っている樹齢約150年の幹。



変えないという仕事

つくる マルチな職人集団

佇まいの裏で

北方文化博物館は、いつも時間がゆっくり流れている。いつも懐かしい日本が迎えてくれる。が、その佇まいの裏には、時代の流れに逆行するような地道な労働があった。

作事という仕事である。敷地内の建物の修繕、庭木の手入れ、薪割り、山林の管理などに加え、昔の仕来たりとおりに行う行事の準備などを受け持ち、伊藤家の心を守っている。前述の小池勝榮さんも七十数年、作事を務めた。現在は吉田誠さんを作事頭として、五人の男女が多岐にわたる仕事を日々こなしている。みんながそれぞれに優れた腕を持つ職人チームなのである。

博物館に来て十三年めの吉田さんは「作事の仕事は、守ることです。変わらない姿であり続けることは、新しいものを作ることより難しい」という。たしかに進歩の速い現代では苦勞も多いだろう。そ

んな時代の激流に掉差するような仕事だが、小池さんも吉田さんも、心のなかに二人の偉大な先人の姿を抱き、励みにしてきた。その一人はもちろん博物館を設立した七代伊藤文吉。もう一人は、造園師の田中泰阿弥である。

泰阿弥は新潟県柏崎市出身。全国の造園業者を転々としながら庭師の腕を磨き、後に銀閣寺のへ洗心石組みの遺構を発掘し復元したことで、その名が全国に知られるようになった。茶道、書道、俳句などに造詣が深く、古い絵図や文献に裏付けられた古庭の復元修復を多く手がけた非凡な職人である。その泰阿弥が文吉に請われ、博物館全体の作庭と、博物館が所有する新発田市の清水園の修築をほぼ同時に行った。小池さんはその現場をつぶさに見ていた。

堆積した時の美

「それはもう、凄い人でした。こんな人が世の中にいるのか、と思うほど、決断が早く、目の前にある沢山の石のなかから選んだ石を、ここが前、ここが天と、眼光鋭く庭

石の置き方を作業員に指示をしていました。実際に、それを現場に据え付けると、びたっと決まるんですね。そして最後には、それまで点だったものが、全部ひとつに繋がりました。それは見事でした。毎日、自分の仕事が終わると走って現場を見に行きました」。

邸宅をとりまく庭は、それまでは老木があるだけの変化の乏しい平庭だった。それをへ一日千人の博物館に来る人に、安らぎを与えたいという文吉の思いに応え、泰阿弥が作庭。工事は五年におよび、工事費も相当な額にのぼり、途中で周囲から反対する声も上がったが文吉は意志を曲げなかった。その経緯を耳にした泰阿弥は意気に感じ、なおいっそう工事に心血を注いだ。庭は昭和三十三年（一九五八）十月に完成。しかし、そのわずか一ヶ月前、文吉は完成した庭を見ることなく急逝。享年六十二歳。それでも泰阿弥は生前の約束を果たす。そんなふたりの胸中に思いを巡らせながら、大広間の横にある庭園を眺める。樹々のすべては泰阿弥が持ちこんだものだという。ただ唯一、小池さんが松の芽から育てた赤松があると、池の端を指差した。と、その時。ゴオーンと世紀を貫く梵鐘の音が渡ってきた。地の底から湧きあがるような読経の低い声も追いかけてきた。すると、にわかに庭のすべての生

き物が目醒めたかのように、潑刺とした空気が庭園を包んだ。文吉も、泰阿弥も決して見ることもない六十有余年の歳月で磨かれた庭園の美が、そこにあった。

竹林の教え

吉田さんが庭園の魅力を解説してくれる。「庭園に借景は余分な要素だと思います。限られた空間のなかに、いかに自然の縮図を表現できるかが造園家の感性と力量です。泰阿弥さんは、水平と垂直の組合せで、どこから見ても奥行きのある（究極の安定）を創りだせた人で、それを博物館の庭園で具現化しています」。去年、ようやく自分の言葉で北方文化博物館の庭を語れるようになったという。寡黙な庭師が、日々の仕事から悟り得た至言である。そして「非凡な造園師と明治気質の文吉が出会わなければ、実現しなかった庭園美を大勢の人に見て欲しい」とも。国内外のいろいろな名園を見てきて、北方文化博物館の庭園が日本一だという。

ところで、〈安定〉を心で感じるようになるために、どのような修練をするのですか？「それに明確な答えはありません。ただヒントは、竹林のなかにありました。わたしも四十年めにして、はじめて気づいたのですが、自宅の裏庭にあ

る竹林がそれを教えてくれました。数ヶ月で十五メートルも成長する植物の生命力を目の当たりにし、もしかして樹は人間より遙かに優れた生き物で、人を守ってくれる力が備わっているのではないかと気づきました。その植物の命が、人に安心感をもたらします。つ

まり植物自体が、あるべき位置を教えてくれるんですね。それを素直に受けとめれば、いいだけなのです」。取材の翌日、吉田さんがライトアップしたご自宅の竹林を見に行く。光に浮かび上がった竹林は、一本一本の竹の個性を強めつつ、全体が調和し奥行きのある幽

玄の世界を見せていた。光の届かない闇が、竹林をいっそう神秘的にしていた。

吉田さんが構想し、作庭した第二庭園がまもなく完成する。山のなかを歩き回り、自らが選び、自らが掘り出し大切に運んできた楓の樹々が植えられる。何十年も前か

ら、そこにあったような自然の気配を創ったという。そして、すこしだけ遊び心を忍ばせた。たぶん泰阿弥に、〈吉田も少しは分かるようになったな〉と言ってもらえる庭になったのではと思っている。どんな令和の美を見せてくれるのか、楽しみだ。



①70年近く手塩にかけて育てた大藤棚の下で、快活に話す小池勝榮さん。
②晩年の田中泰阿弥(72歳)〈北方文化博物館提供〉 ③正面受付の左手に見える老松の巨木。
④七代伊藤文吉(60歳)〈北方文化博物館提供〉 ⑤昭和に紛れ込んだような作庭場で、話し込む吉田誠さん。

田園地主の大きな愛

伝える 奥ゆかしい日本の心

奇跡のおくりもの

北方文化博物館の名物、大藤棚が見事な花を咲かせる日が近い。そして今年は、新しく奇跡の藤物語がそえられる。この藤棚に咲いた藤の花

びら約三千七百枚のなかの、僅かひとひらの花びらから、お酒の醸造に欠かせない酵母が採取され、それで造った清酒がデビューする。県醸造試験場、新潟大学、横越商工会が連携し三年がかりで研究開発した、まろやかな甘さと幽かに花の蜜を思わせる香りが特徴の清酒。樹齢約百五十年の藤が、心も酔わせる味な贈り物

をしてくれたのである。奇跡と言えば、北方文化博物館が生まれた経緯こそ、奇跡的な出会いが生んだヒューマンドラマである。終戦後、アメリカの進駐軍の占領下におかれた日本は、旧来の封建的な体制を徹底的に解体された。農地解放も、そのひとつ。それにより農業に根ざした日本の生活文化がいずれ消えていくだろうと予測した七代伊藤文吉は、伝統を守り伝えるために博物館をつくり、全財産を博物館に寄付することを決断。その決断にいたるまでの道筋を強力にバックアップしたのが、たまたま新潟に駐留し

ていた進駐軍のラルフ・ライト中尉。二人はペンシルバニア大学の先輩後輩の間柄。片や占領する側、片や占領される側として奇跡的に出会い、国は違っても、それぞれの国で守られてきた伝統文化の重要性を認識できる知性を持ち合わせていたことが幸いした。こうして明治二十三年（八九〇）に建てられた豪邸が守られ、わたしたちはいつでも手軽に古き良き時代にタイムスリップできる。

泣かせる話

副館長の佐藤隆男さんに、伊藤家



の心のありようなど聞いてみる。八代伊藤文吉の秘書を長年務め、当主とともに世界の国々を見聞した経験から、グローバルな視点で捉えた博物館の特徴を語ってくれた。

「伊藤家は、代々優れた知性を持った人の多い家系です。初代の安蔵（文吉）は分家して親からもらった農地を小作地にし藍の生産を人に任せ、自分はその販売と倉庫業に乗りだします。そして、集落の農民たちに藍の栽培のための前渡し金を渡し、収穫時にそれを回収する（囲い込み方式）で、栽培農家を増やしました。集荷量が増えれば利潤も大きくなり、その儲けで農地をどんどん取得していきました。江戸中期にしては、なかなか進歩的な経営戦略を描ける人でした」。なるほど伊藤家の血筋は、ビジネスマン？

「新潟は地主王国といわれ県内に大勢の千町歩地主がいますが、伊藤家のユニークな点は、金融地主だったことです。信濃川や阿賀野川が流れる新潟平野は低湿地が多く、自

然災害などで米の収穫は年によって不安定でした。さらに明治初期の地租改正で税の収納法が、米から貨幣に変わると農家はますます困窮していきます。伊藤家には（田地買うなら精々悪田を選べ、悪田は美田にして小作へ返せ）という口伝があります。これは疲弊した農村を救うためには、大地主が土地改良をするしかない、という意味です。低湿地の悪田を担保としてお金を融通し、もし返済ができなくなっても、持主だった家の耕作権をそのままにして、伊藤家の小作人として関係を維持していました」。そうか農民想いの地主だったんだ。確かに資料でも、（困って、うちに頼みに来るのだから、できるだけ良い値で買ってあげなさい）と農民の心を汲んだ奥様がいたという記録がある。また農家の間では（困ったら沢海の伊藤さまの所へ行け）という話が広まっていたとあった。伊藤家の土地集積の背景には、零細農民に心を至らせる深い情があったのだ。

温かい空気

「当館と他の博物館との大きな違いは、いまも、ここで昔ながらの伊藤家の暮らしが普通に営まれていることです。屋敷のなかに当主の家族が暮らしていて、昔の仕来たりどおりに行事を行っています。一年で四十種ほどでしょうか。今日も、仏壇を洗濯（修復）するまへの準備として動座法要が営まれます。これらの心の伝統を守ること、博物館の大きな役割で、博物館スタッフも伊藤家の家族の一員として行事に加わります。こうして家族的な関係を築くことで、公共の博物館にはない温かい空気を館内に醸しだしています」。

建国記念の日に、開館七十四年のお祝い行事が行われた。豪農伊藤家ならではの勇壮な三人餅搗きの実演、搗きたての餅のふるまい、横越地区の神楽舞の披露に続き、福まきがあり、大勢の人が大広間でヒートアップした。驚いたことに、それらのもてなしの一部は、伊藤家

が博物館になる前から集落の人たちを招いておこなう旧正月の伝統行事そのものだった。また戦時中には、戦地に行った兵士の留守家族を励ますために、映画上映など、いろいろな娯楽が催されたという。大広間には集落の人たちの記憶も渦巻いていた。その事実が気づくと、豊かな財力の象徴としか思えなかった大広間から、にわかに、たくさん笑いの声聴こえてきた。

豪壮な館が建てられて一世紀を優に超えた豪農の館。にもかかわらず、いまだ日本的な奥ゆかしさと清々しさは消えていない。ただ、その足元に越後農民と苦楽をともにしてきた伊藤家代々の大きな愛が埋もれていたことを、はじめて知る。江戸中期から幾多の時代の変化を、自らの才覚と努力で超えてきた記憶の堆積こそが、未来への道のりを示唆する心の巨樹そのものだった。こんな時だからこそ敷地内にある数多くの樹々とともに、青い空に心を放ちたい。

- ①花芽の剪定を終えた早春の大藤棚。
- ②大きく長い花が圧巻の大藤棚。例年4月下旬から5月中旬が見頃だが、今年は早まる見込み。（北方文化博物館提供）
- ③大藤棚の藤の花びらから奇跡的に採取された酵母で造った清酒「八代 伊藤文吉」。この春、当博物館と横越地区の酒店などで限定販売された。
- ④伊藤家の膨大な記憶が次々に口をつく副館長の佐藤隆男さん。いつまでも聞いていたい貴重な話ばかりだった。



開館74年記念行事で行われた三人餅搗き。



大広間の前の庭園に立つ小池勝榮さん（88歳）。実年齢よりはるかに若々しく、貴重な経験談をたくさん記憶している。

インフォメーション

北方文化博物館

〒950-0205 新潟市江南区沢海2-15-25
TEL 025-385-2001

読者の声 ～前号を読んで～

初めての「ちんころ」

「ちんころ」何てカワイイ！呼び方でしょうか！伝統が受け継がれていて、本当に良かったですね。はじめて知った「ちんころ」。近くだったら買い求めたいと思いました。貴誌も、よくぞ取り上げてくださり勉強になりました。

（岐阜県本巣市 70代女性）